

2013 年度（第 9 回）奨励賞選考委員会報告

奨励賞選考委員会 委員長 小笠原正明
委員；省略

受賞対象：過去 4 年間の学会誌（第 32 巻 1 号～第 35 巻第 2 号）に論文が掲載された会員

募集締切：2013 年 12 月 20 日（事務局必着）

応募状況：自薦、他薦 計 7 件

候補者の選考：2014 年 3 月 12 日 奨励賞選考委員会にて決定

【選考結果】

対象論文はすべて編集委員会の閲読を経て学会誌に掲載されたものであり、一定の水準を保っている
と判定されるが、総合的に評価した結果、山本裕子会員を奨励賞の受賞候補とすることに決定した。

【受賞候補者】

山本 裕子会員（早稲田大学）

【対象論文】

研究論文「大学の学科構成の変化に関する基礎研究－1990 年代以降の分析を中心に－」（第 34 巻第 2
号、2012 年 11 月、120－129 頁）

（論文の概要）

対象論文は、1961 年から 2010 年までの 50 年間の学科構成の変化状況について、公的な統計資料、個
別大学の沿革史など膨大な資料を駆使し、政策背景、社会背景と関連づけながら、一部にヒアリングも
実施して実証的にデータ分析を行い、変化の全貌を明らかにしている。

寺崎昌男会員、関正夫元会員による 1970 年代から 80 年代の先行研究を批判的に参照しながら、1990
年前後（入学定員臨時増と設置基準大綱化）の以前と以後を整理し、「問題解決型の学部・学科や、将来
の職業に繋がることがより明確にわかりやすい学部・学科へのニーズが高まっている」とした上で、「大
学は『従来のディシプリンの学部を持つ研究機関』としての性格が強い近代型から、『社会的ニーズに対
応し多様な教育機関としての役割を持つ機関』としての現代型大学へと、大きく変化している」ことを
検証し、その動向が各種公的報告書における社会要請と重なっていることを実証的に指摘している。

（評価の概要）

学問の専門分野から学部・学科が編成されるのではなく、社会的課題・要請から学部・学科が誕生す
る傾向はおおむね周知の現象であるが、統計的、実証的に分析した論文はこれまでなかった。その意味
で、当該論文の題目にあるとおり、大学教育の歴史的研究における「基礎研究」として重要な意味を持
つ。

選考の過程で、当事者へのヒアリングが十分とは言えない点、学問におけるディシプリンという概念
の検証が欠如している点など、いくつかの課題が指摘されたが、全体的には、寺崎会員、関元会員の先
行研究を丁寧に分析し、問題解決型により重点が置かれて学科が組織化されていること、この傾向は関
元会員の示した理工系学部だけでなく、文系や保健分野における学科構成の原理になっていること、ま
た、この傾向は、90 年代よりも、さらに 21 世紀に入ってより強い構造変化として現れていることなど、
学部・学科構成の変化を政策的課題や社会的要請と結びつけて粘り強く実証的に明らかにしていること
は、今後の大学教育研究の展開を見据えても、基礎研究として大きな意義を有すると判定された。